

社



學

日本社會學會 [年報]

(第一輯)

岩波書店刊行

# 目

# 次

## 論 説

社会學の對象とその認識	尾高朝雄
社会學に於ける應用の問題	尾高朝雄
意味聯關係	松本潤一郎
現實態	白井二尚
沒有價値性の問題	白井二尚
客觀的眞理と實踐	尾高邦雄
ファシズムの世界觀	小松堅太郎
現代の危機と理論の實踐性	新明正道
清水幾太郎	六

## 日本社會學會第八回大會研究報告

第一部 原理論	一九七
---------	-----

社会學批判の課題(清水)——科學の階級性と眞理の妥當性(小松)——社會科學的概念構成に就いて(白井)——社會科學的眞理の本質(尾高)——社會概念の發展並びにその理論構成の推移(陳)

第二部 特殊理論	二〇〇
----------	-----

社會進歩に就いて(岩井)——バールとグルッペ(重松)——バール集團に就て(松本)——競爭の社會學に就いて(黒川)——個人主義的社會學說に就いて(志水)——差異の社會學的意義について(難波)——イデオロギー論に於ける一問題(大道)——宗教社會學の課題(森)——文化團體としての教團の分化の特性に就いて(福場)——農村部落の社會學的研究(鈴木)——パレートの社會學とファシズムに就て(井森)——ファシズムの社會的基礎(加田)——最近に於ける新聞の社會學的研究(小山)——政治概念の社會學的研究(大山)

第三部 歷史	二四二
--------	-----

アメリカ社會學史の方法について(早瀬)——工人の群移動と工技の傳播(井上)——農民階級構成の史的段階(喜多野)——母系制の起源について(姫岡)——善導に現はれたる連帶思想に就て(三枝樹)——近世日本思想史に於ける個人意識の發達(下地)

第四部 政策	二六〇
--------	-----

村祭に現はれたる朝鮮の社會(秋葉)——村落に於ける婚姻と家系の調査(小山)——失業比率の產業別考察(三好)——知識階級の就職の問題(川上)——大學と政治運動(藤田)——大阪市に於ける日傭勞働者の災害保險制度(平田)

日本社會學會第八回大會記事	二五七
---------------	-----

海外社會學情況	二八
---------	----

新刊批評	三一
------	----

學會彙報	三三
------	----

的真理なるものの生存は確立せられるのである。この場合かくして生じた真理がかの植物の果實のさうである如く再び新き真理生成のための即自然段階の契機たり得るといふことは、ここに更めて断るものもなく明かであらう。社會科學の真理はその對象たる社會それみづからがこれを「創造」するのであり、それにあつては一般に存在<sup>シナティッシュ</sup>なる眞理と存在論<sup>シナトロ・ダクシ</sup>なる眞理との間の區別は存しないといふことが出來たであらう。

詳しく述稿「沒價値性批判」、東京社會科學研究所年報第一輯（昭和八年）第八章第五節を参照せられたし。

## 社會概念の發展並びにその理論構成の推移

東北帝國大學 陳 紹馨

諸の概念や範疇並びにこれに基づく理論體系は、一定の歴史的な物質的生活關係の反映であり、物質的生活關係の發展と共に概念や範疇も亦發展し、それに従つて理論體系の變革がおこる、といふ科學的指針に照して見る

派）となつた。「經濟學は近世市民社會の理論的分析である」（エンゲルス）。それは進歩的な市民階級の武器であり、市民社會内において階級對立が成立する迄は、人間共存生活を説明する科學的な理論であつたが、新しい生活關係の成立と共に、その體系が動搖した。

十八世紀に市民革命を成就した英佛の市民階級は、幾多の苦闘を経て十九世紀の三十年代に政權を獲得した。資本主義的商品經濟は確立され、イギリスでは一八二五年の恐慌と共に大工業が近代的生活の周期的循環を始めた。資本主義的商品經濟は人間を緊密な關係に結びつけ、遙か遠方の市民におこつた經濟變動が直接我等の衣食を脅すに至つた。廣い地域に亘る人間が茲で事實的に「一體」となり、一つの統一的な國民經濟を構成するに至つた。それと共に同一生活統一體内の貧富の懸隔が益々顯著になり、つひには階級對立が現れて来る。この集成分化した複雜な生活關係、呪ひあひながらも同じ天日を戴かなければならぬ宿命的な生活統一體、これは市民革命以前に見ることの出来ない新しい事實である。他方において、物質的生活關係の變動と共に諸種の精神生活

時、我等は、諸種の社會概念及びそれに基づく理論體系が一つの發展法則によつて貫かれてゐることを見ることが出来る。

近世以後における最初の組織的な社會概念は、十六世紀以來準備され、十八世紀に至つて成熟への巨歩を進めた「市民社會」の概念であつた。十六七世紀の英佛における封建貴族と新興ブルジョアジー及び絕對支配を追求する君主との間の鬭争、更に、封建的勢力が克服された後における絕對君主とブルジョアジーとの鬭争において、市民社會の概念は、自然法論における自然狀態として抽象的に表現された。市民階級が優勢となると共に、その武器もまた經驗化され、自然法論の自然狀態說や社會契約說に對する批判として所謂「社會の自然論」が現れた。人間は本來共存的なものであり、社會は個人に対する。市民社會は新興市民階級を中心とした物質的生活關係であり、ブルンチユリの所謂「第二階級的な概念」である。市民社會の諸種のイデオロギーは組織され集成されて十八世紀中葉以後の體系的な經濟學（重農派、正統

や觀念形態を動搖し、兩者の密接不可離の關係が白日の下に曝された。茲に至つて、對立する物質的生活關係とそれに對應する法律上政治上の諸關係並びに諸觀念形態の總てを包括する生活統一體の概念が成立した。我等はこれを綜合社會の概念と名付けよう。

四十年代に成立したコントの社會學とマルクス・エンゲルスの唯物史觀はこの新しい事實の認識に基いて構成された。社會學と唯物史觀とは性質を異にし寧ろ對立するものであるが、ほぼ同じ歴史的段階の產物であり、同じく綜合社會の理論であるといふ點において幾多の類似を示してゐる。第一に兩者共に實踐的意圖に基くものである。前者は市民的立場からの社會の安定化を、後者は無產者による階級對立の克服を意圖とした。第二に兩者共に理論構成の過程において、經濟學の批判をし、更に進んで市民社會の批判をした事である。しかもコント、マルクス共に物質的生活關係と觀念形態との關聯を主要論題としたが、兩者において土臺と上構の關係が正反對になつてゐる。マルクスの社會概念は經濟的構造を基礎とする社會形態であり、コントの社會概念は秩序と帶連

を基礎とする人類社會である。これらに基いて彼等はそれぞれ綜合的な體系を構成した。

コント、マルクスの體系の成立した四十年代に、ドイツになじての二者と性質を異にする「ドイツ社會科學」(die deutsche Gesellschaftswissenschaft)がおこつた。ドイツの經濟の發達は英佛に比べて著しくおくれ、三十年代迄は社會科學を發生せしめる地盤を缺いてゐた。關稅同盟の成立後にドイツ人は始めて經濟學といふものを理解するやうになつた(エンゲルス)。ドイツ資本主義の發達は英佛に比べて著しくおくれたが、一旦發展の途に上つた時それは急テンポを以て進み、四十年代に既に市民的な經濟學の説明し得ない幾多の問題を齎した。されば「ドイツのブルジョア的經濟學は、それが可能となつた如く見え始めるや否や、また不可能となつてしまつたのである」(マルクス)。經濟學において餘地を見出すことの出來ない問題、即ち當時發見された「社會」の問題を處理するために、「ドイツ社會科學」が成立したのである。此「ドイツ社會科學」はドイツの經濟發展の特殊性に對應して、英佛の同時代の理論に比べて著しい特色を

なつたのである。この同じ歴史的地盤がドイツの綜合社會學を成立せしめた。八十年代に西歐社會學と「ドイツ社會科學」とドイツの綜合社會學が融合統一し、社會學は集成された。併しそれと共に更に一段の辯證法的發展に入つたのである。

十九世紀の末葉が社會學の轉向點であることは、既にカカリの指摘した處である。十九世紀の末葉に至つて資本主義は極度に發展し、帝國主義の段階に入つた。商品經濟の網は世界の隅から隅まではられ、萬人は萬人に對して密接不可離の關係を結び、人間は打つて一丸となつた。他方、總てのものは貨幣の媒介を經て共通的なものとなつた。人間生活の複雜化と共に、その各々の具體的内容から離れた一般的抽象的な概念が漸次に成立した。マルクスが「經濟學批判」の序説で検討した勞働の一般概念がその一例である。人間共存生活的領域においても、人間關係の極度の分化と共にその一般的普遍的な概念が、即ち社會關係一般の概念が可能となつたのである。この新しい生活關係について社會學者は一般社會概念を構成し、それに基いて個別科學としての社會學を樹

立した。九十年代におけるテエンニース、ジンメル、タルド、デュルケム、ギディングス等の體系がその代表的なものである。彼等以前の社會學が多くは傳來的の體系の敷衍乃至修正にすぎなかつたのに對して、彼等はコント、スペンサアの體系に對する批判から出發した。彼等は人間心意を分析することによつて個別科學的社會學、純粹社會學を樹立した。この現象はもとより物質的な生活關係に基礎付けられたものに他ならない。彼等は、歷史的社會的現實態における利益の對立を視野の外におき社會の抽象的原理を構成し、その人倫的道義的性質を強調し、それを指導原理として觀念の領域において社會的組織化安定化を圖ると共に、更に進んでこの抽象的形式的原理によつて市民階級の積極的活動を宣揚したのである。

以上が、最近における文化社會學の擡頭に至る迄の状勢である。従つて、近世以後に於ける人間の共存生活に關する基本概念として、市民社會概念と經濟學、綜合社會概念と「綜合社會の學」、一般的抽象的社會概念と個別科學的社會學、を確立することが出来る。諸種の社會概

念及び社會學の體系は、これらの内のいづれかに歸屬するものである。諸種の社會概念及び「社會の學」の歴史的階級的關聯を指摘することによつてそれらを批判し、

## 第一部 特殊理論

### 社會進歩に就いて

廣島文理科大學 岩井龍海

社會進歩は常に社會學の重要な研究主題の一となつてゐる。乍然、社會學に於ける社會進歩の研究には多少の盛衰消長がある。概言すれば、歷史哲學的百科全書的社會學が優勢であつた頃は、社會進歩の研究も盛んであつたが、近來、分析的形式的社會學が優勢となるに隨ひ、衰へて來た。

社會進歩に對する學者の態度に三ある。第一は消極的

態度であつて、社會進歩を否定する。例へば、進歩の學念は空想に過ぎない、星學、古生物學、生物學、歴史は進歩を反證するとするラブーリの如きこれである。第二は無關心的又は中立的態度である。社會進歩は主觀的である、社會變化と云ふ單純な事實を取扱ふのが社會動學の任務であるとするロッスの如きこれである。第三は積極的態度であつて、ドウの如きこれに屬する。

社會進歩の研究は現在盛んでないが、社會進歩の事實は否定出來ない。之を綜合的に言へば、共同社會が、その成員たる個人の個性化により、それ自ら社會化する過程である。今これを分析的に言へば次の四項から成る。

第一に、社會は共同社會（全體社會）に就いて言ふのが最も適當であらう。その歴史的發展の階段は、村落共同社會、都市共同社會、封建共同社會、國民共同社會であるが、やがて國際共同社會に發展するものである。第二に、社會進歩は、共同社會の成員たる個人が、個性化することである。社會生活上必要不可缺な個人の資格中、重要なのは道德、職業である。この二は、先づこれを二元的に見られ、一元的に見られる。就中職業は先天的遺傳と後天的環境との合成たる個性と關聯し、他面にはその相互依存性が分業と關聯してゐる。分業は共同社會の擴大と共に、益々増進し、又益々統整される。分業にも種々あり、弊害も伴ふが、それは外部的、偶然的であるから、一般に、分業の增進は文明の進歩である。第

三に、社會進歩は共同社會の社會化、即ち社會が社會化を發揮することである。社會化は向內的には、社會がその成員をして、益々その個性を發揮し、相互に益々緊密なる關係を保持せしめることである。向外的には、相互依存、相互補充をすることである。各國が自國の特徴を發揮しつつ、然も國際協調、國際協力することである。

第四に、社會進歩は個人の個性化に依る社會の社會化である。そこで個性化と社會化は、決して相反對する過程でなく、又相平行する過程でもなく、實に同一過程の兩面である。

之を要するに、社會進歩は之を個人として觀れば、忠實に職業を實行し、之を個人相互關係として觀れば分業が益々擴大し又益々完全に行はれ、之を社會として觀れば個人をして能くその個性を發揮せしめ、之を社會相互關係として觀れば相互に自己の文明を以て、他の文明を補充し以て人類社會の進歩發達を促進する過程である。

### パールとグルッペ

京都帝國大學 重松俊明

眞に我に對立する所の他者、我と全く同格性、同位性を持つものとしての他者、換言すれば Meinesgleichen としての他者、即ち「汝」が見出されない所には、眞の社會も亦成立し得ない。

此の如き社會が成立しない所では道德、人倫、藝術、

會告

- 一、本會へは何人と雖も會員一名の紹介を以つて入會するを得。  
一、會費は年二圓、前金法によりて徵集す。  
一、會費は三錢、二錢及び一錢に限り郵券にて御送付あるも差支  
なし、但し一割増の事。  
一、本會々員にして轉居其他移動ある時は速かに御通知あるべし。  
一、本會事務は東京帝國大學文學部社會學研究室宛申込まるべし。

日本社會學會

